

道

m i c h i



6

2023 No. 61

世界救世教 明主様と聖地に直結する会

天国は芸術の世界

私は常に天国は芸術の世界なりと言うが、単にこれだけではあまりに概念的である。なるほど美術、文学、芸能などが充実することも、右の通りで大いに結構ではあるが、本当からいうとあらゆる芸術が揃わなくてはならない。否芸術化されなければ真の天国とはいえないのである。

私が唱えるところの、浄霊法による病気治しにしても、実をいえば立派な生命の芸術である。何となれば芸術なるものの本質は、真と善と美の条件に適合しなければならぬからである。まず何よりも病人には真がない。というのは人間は健康であるべきが真であって、健康を害ねるということは、もはや人間本来の在り方ではなくなっている。例えばここに一箇の器物があるとす。その器物のどこかに破損ができるとすればその器物の用途は果たせない。水が洩るとか、置くと倒れるとか、使うとすると毀れるとかいうのでは、器物としても真はない。したがって何とか修繕して役に立たせるようにしなければならない。人間もそれと同様、病気のため人間としての働きができないとすれば、無用の存在となってしまうからその修繕をする。それが本教の浄霊である。

次に善であるが、人間に善がなく悪のみを行うとすれば、これも真の人間ではない、動物である。かかる人間は社会に害を与えるから不要どころか、むしろ生存を拒否しなければならないことになる。しかしそれは生殺与奪の権を握られ給う神様が行わせられるのである。その結果失敗したり、病気で苦しんだり、貧乏のドン底に落ちたり、中には生命までも喪うようなものさえある。まったく神様に審かれるのである。しかし単に悪といっても意識的に行う悪と、無意識的に行う悪とがある以上、その差別に相応の苦しみが来る。その点は実に公平である。

最後の美であるが、これは説明の要がないほど、分かりきったことだから略すが、以上によってみても明らかなごとく、真善美の具現こそ、この世界を天国化する根本条件である。

したがって、吾々が病気を治すのも、農耕法を改革するのも勿論芸術である。前者は前述のごとく、生命の芸術であり、後者は農業の芸術である。これに加えて吾らが地上天国の模型を造るのも美の芸術であって、右の三者の合体によって、真善美の三位一体的光明世界が造られるのである。これすなわち地上天国・ミロクの世の具現である。

(「栄光」72号 昭和25年10月4日)

重要文化財

聖観音菩薩立像

奈良時代(8世紀)
MOA美術館所蔵



観音は、元来阿弥陀如来の脇侍であったが、後に三十三の姿に変化することが説かれるようになって、その基本的な姿を聖観音と呼ぶようになった。聖観音像は、若干の例外もあるが、宝冠中に阿弥陀如来の化仏(けぶつ)を戴くのを定型としている。この像は頭部に三面宝冠をつけて立つ菩薩像で、宝冠正面の龕(ずし)中に如来坐像が表されており、左手に蓮華の蕾を持ち、右手の先は首から下がった瓔珞(ようらく)を執る。頭頂部から台座までを一本の木から彫り出す技法で制作された檀像で、ほぼ直立しているが、腰には少し動きが見られる。量感ある体躯の表現、衣や宝飾の緻密な彫り出しの技法には、盛唐様式の影響が見られる。しかし面相や体部の表現などは、柔らかく穏やかなものとなっており、そこに仏像彫刻における日本の特色を見ることができよう。こうした特色から、この像は奈良から平安時代にかけて制作された檀像彫刻における八世紀の作例と見ることができ、延暦寺伝来の伝承とともに貴重な観音像である。

(MOA美術館・箱根美術館 名作美術品カレンダーより)

《目次》

代表挨拶	4
感謝奉告	11
六月度聖地行事・地上天国祭	12
聖地直結の会・各地から会合奉告	14
シリーズ明主様(5)青年時代	16
聖地NOW	18
ブラジル信徒の信仰体験談	19
お知らせ	22
冊子発刊について	23

令和5年 課題

われよしの 心浄めて ひとよかれと

祈る心は 神に通へる

明主様の示された「道」を求め、まっすぐ歩む

代表挨拶

西村 正資

梅雨の雨 しとしと降りて神苑の

緑深まりいと静かなり

(昭和二四年八月一日 明主様詠)

長雨に、つい灰色の空ばかりを見つめてしまえますが、聖地のあちこちに嬉しそうに咲く紫陽花が目に入り「慈雨に気づき喜びを見出しなさい」と、教えられ

ているようです。

つつじ山の下手斜面や旧事務所周囲に、可愛い花がご覧であればかりに咲きほこっています。ご参拝の折にはぜひお楽しみ下さいませ。

箱根神仙郷が完成して七〇年、大きな節目を迎えた今年の六月一五日、主神のお働きが一段と強くなるという特に意義深い『地上天国祭』をお迎えさせていただきました。

聖地祭典には、全国から当会会員一〇一名の皆様が、明主様の御許にお帰りになりました。それぞれ日々のご報告や感謝そして祈りをお捧げになり、自らの向上もお約束されて聖地を出発されたものと拝察いたしております。

また、祭典終了後には、恒例の『明主様と聖地に直結する会、全国信徒集会』が開催され、約八〇名の皆様が集集されました。久しぶりの再会で旧交をあたため合う方や初めての参加で挨拶される方等々、笑顔に満ち元気をいただく賑わいを感じさせていただきました。

嬉しいご報告

当会の最近の動きとして嬉しいご報告があります。地上天国祭を目前に、明主様のみ教えに基づく信仰を求めて、全国で数十世帯の皆様が、当会に参加される

ことになりました。まことに嬉しいかぎりです。

会員の皆様は、明様のみ心を求め、道なき道を開拓され、そして全国至る所でみ教えに真つすぐ向き合われ実践されています。その歩みの跡には、み教えを礎にした道が生まれ、後から歩まれる方々の道標ともなっております。そのことが、明様にお喜びをいただいたものと勝手ながら受け止めさせていただいております。心から、皆様に感謝を申し上げます。

しかし、現実界における明様のご経緯、教団全体の教勢は、非常に厳しい局面にあるものと、私は自戒しております。

皆様と共に、これからもみ教えに沿うよう、立ち止まることなく真直ぐに歩ませていただきたいと決意しております。

G7首脳の「広島平和記念資料館」訪問に思う

さる五月一九日、広島で開催された先進国首脳会議参加の各国首脳が、岸田総理と共に「原爆ドーム」「広島原爆資料館」を訪問し、平和への祈りと誓いを記帳しました。

核廃絶への大きな期待もあり、一部では「何も進展しなかった。期待外れ」等と評価されましたが、現在、誰もが感じる世界の危機に合わせるかのように、また、

靈的に意義ある地上天国祭直前に、広島という地に、世界のリーダーが集められ、人間の未熟さ故の地獄的惨状を見せられ、そして世界平和に責任ある立場を改めて自覚させられるというのは、私には、神様が仕向けられたとしか思えません。皆様も決して偶然ではないと感じられたのではないのでしょうか。

そこで記された平和への祈り、決意は決して絵空事の外交辞令ではないと信じています。以下、その一部を記します。

岸田総理「核兵器のない世界」をめざすためここに集う」

バイデン米大統領「世界から核兵器を最終的に、そして永久になくせる日に向けて、共に進んでいきましょう。信念を貫きましょう！」等々です。

靈界が大きく転換する地上天国祭の時期に合わせ、全人類を代表して神に捧げられた「誓い」であり「祈り」であると信じます。

祖霊大祭を目前にして

地上天国祭を終えますと、八月一日祖霊大祭が目前となります。祖霊様の事では、昨年ある不思議なことに出会いました。

それは一〇月、山口県で初めての集会有り、たま

たまご先祖様のお祀りの話題となりました。そこで、私が当地に居た当時の霊的事象の思い出話をしましたが、皆様、お忘れのようで、改めてその時の出来事と学びを確認しました。

死霊にかかられた人々

その日は、会合のため広島に出張。新幹線に乗りした直後、布教所から電話が入りました。高齢信徒Nさんのご長男（五〇代）が亡くなられて、その日が葬儀の日とは聞いていましたが、「葬斎会場のNさんから、『病人が複数いるから誰か浄霊に来てくれないか』との電話が入りましたが、どうしましょうか」ということでした。亡くなったご長男は、元々信仰には大反対で、周囲には嫁がれた娘さん以外は、皆本教とは関わり無いばかりのほずで、なぜ浄霊の要請があったのか不思議でした。そこで「一度様子を見に行ってください」と、依頼しました。

しばらくして報告があり、「大変です。死霊がかかっています。それもNさんの妹で、故人の叔母さんにあたる方達三〜四人です。『苦しい、苦しい』と大きな声でもがいています」。私は、広島で会合が始まっていたので、「浄霊に行けそうな信徒に直ぐ電話をし、皆で取り次いで下さい。私も出来るだけ早く帰りますか

ら」と伝えましたが、広島の会合に参加されている方のことを思い出すと、途中で切り上げることも出来ず、ご祈願を続けました。

お昼近く、電話で様子を聞きました。「信者さんが四〜五人駆けつけ、皆で浄霊しています。苦しさは収まり、今度は『〇子（故人の二女）を頼む』と、大きな声で叫ぶのです。周囲の親戚は、取り囲みながら『〇子の事は判ったから。もうすぐお葬式が始まる。参列者が来るから早く棺桶へ帰れ』と言うんですが、憑っている霊は『嫌だ！あんなところに行きたくない』と言って、押し問答で困っています』ということでした。そこで私から「もし良かったら、近くに私どもの施設がありますから、そちらで休まれても結構ですよ」とお伝えしました。すると直ぐに「是非そうしたい。お願いします」と、霊に憑られた方々は、布教所に移動することになりました。

霊の存在を「考えない」人々

私が戻れたのは夕方でした。布教所御神前の隅に、知らないご婦人が四名待つていらっしやいました。

ご挨拶をしながら、いきさつを伺いました。「夕べ、斎場に泊まりこみしていた時からおかしい気配があり、『気味悪い』と話していました。朝方、突然姉が『苦し

い！』ともがき始め、びっくりして『お姉ちゃんどうした』と、さわつたとたん、私も同じようになり、妹がびっくりして私に触れたとたん、妹も同じようになつたのです。でも、不思議と私共の意識ははっきりしているし、苦しくもないのですが『苦しい！』と大声を自分が出しているのです』ということでした。

「今は、どうですか？」と聞きましたら、「手をかざしていたから落ち着きました」「何が起こつたと思いますか？」「おそらく甥っ子の死霊に取りつかれたと思います」「私もそうだろうと思います。皆様は、そのような霊の存在を信じていましたか？」「考えたこともありません」。お一人の婦人に関しては、臨死体験があるようでした。「甥っ子さんの苦しみはどうになりましたか？」「楽になつたものと思います」「今もここにおられますか？」「おそらくお葬式に戻つたのではないでしょう。か。もう怖くてあそこには行きたくありません」。

私は、み教えに基づいて「死後の世界の存在を知ることとは、とても大切なことです」。そして、「甥っ子さんは、脳梗塞で倒れて一年、植物人間の状態で寝ていて、一見楽に亡くなられたと思うでしょうが、皆様が体験されたように、ずっと苦しみ続けていらつしやつたと思います。それを表現できないから苦しみは倍増だつたでしょうね」。そして、人生を通して魂を浄め高めて霊界へ帰らないと、逃げ場のない厳しい浄化が行われる

こと。浄霊の力ではそれが癒され、甥っ子さんも霊界に素直に向かわれたこと等を伝え、「これは私の体験談ではなく、皆様ご自身が体験されたことですよ」と念押しをし、正しく力ある信仰をされることをお勧めして、お帰りいただきました。

以上が、一七〇八年前の出来事の整理でした。

集会参加者は、そのことを思い出され、改めて信仰の確かさと祖霊様のお祀りの大切さを確認し合いました。

祖霊様は「救済力」あるところで祀られたい

その翌日、周南市の信徒宅に伺いました。参拝とご浄霊を終えますと、その信徒からいきなり「昔のことですが覚えておられますか。布教所の近くで死霊がかつて大騒ぎがあつたことを。あの亡くなつた方の妹さんから数日前突然電話があり『先祖様のお祀りが気になるのですが、どうしたらいいか教えて下さい』と、聞いて来られたのです」という言葉が出てきたのです。前日から一緒に案内して下さつていた方が「おう、鳥肌たつた！」と、思わずつぶやきました。私達が当日そこを訪れることは、霊界では既に知られて、N家ご先祖様は「明主様の御許で祀って欲しい」と、求めて来られたのです。その期待が自分に仕向けられていることに、

責任と緊張感を覚えました。

神様のことは、理屈だけではなかなか見えにくいものです。そのような体験を通して教わることは、とても有難く、お世話をさせていただく側にとりましても大きな学びとなります。

先祖様のお祀りは、誠を込めてしっかりと丁寧に慰霊をさせていただきたいと思えます。

機関誌『道』五月号の感謝奉告より学ぶ

徳島グループ、MKさんの奉告です。昨年末には、腰痛が集会でのご浄霊によって軽減するご守護をいただかれました。そのこともあり、嫁いでいる娘さん宅で養生することになりましたが、気がかりが一つ。同居の息子さんが長年の金属アレルギーで、電気製品やスプーン・ナイフ、硬貨等まで一切手にすることが出来ず、思い通りにならなくなると、つい荒れてしまうことがあったのです。果たして一人で生活ができるか、グループの皆様も毎日ご祈願やその場からの浄霊に取り組まれたようです。養生を終えて帰宅すると、なんと別人のように電気製品を使って生活をされていたのです。まさに、息子さんを立ち直らせるための自分の浄化であったと感謝されています。

また四月には、息子さんが突然激しい腹痛を訴え、

近くの病院で検査したところ、胆石が二つあり、すぐに処置が必要な状態と県立中央病院を紹介されました。しかし、翌日病院に行くと、胆石は無くなり、痛みも消えていたのです。

そのようなこともあり、自宅を会場にした「浄霊会」を二カ月ぶりに再開、息子さんは「浄霊会開催は、我が家に信者さん達を通して、明主様が多くのみ光を運んでくれることだ」と、感謝されています。

信仰仲間が祈り合うこと。明主様の御用に自宅をお使いいただくことの尊さを、教えられているように思えます。

浜松布教所、EYさんです。この一月に、新型コロナに感染したようです。熱は最高39・1℃まで上がり、ひどい頭痛に苦しんだようですが、自己浄霊をすると軽くなり、終えると痛み出すという繰り返しの中で、下痢もありました。

EYさんは、ワクチン接種を一度も受けていませんでした。医師の弟さんは「コロナ患者で症状の激しいのは三割、それに当てはまる」とおっしゃったようですが、五日程で症状も落ち着いたようです。

昔、先達から「熱が出たら、お赤飯を炊け」と聞かされました。極端な表現かもしれませんが、その意味するところは、私達の肉体は、食品添加物や残留農薬、

薬物、空気の汚染等々、様々な不要物を絶えず体内に取り込み、また老廃物等、排泄が間に合わないことも多く、結果蓄積されてしまいます。しかし、神が許した人間の生命力は、健康維持のために、体温を上げ、蓄積された物を溶解し、鼻汁や痰、汗や下痢等で体外に排泄し、健康を維持すべく絶えず働くのです。それが一般の風邪であり、インフルエンザであり、コロナといえども意味するところは同じと思います。

ご浄霊は、そうした体内機能、生命力の働きを促し、個人の体質や体力に応じて体温を高め、毒物の排泄を容易にします。ですから、発熱は、たしかに苦痛ですが、本来有難いもの。明主様は、神から人間に与えられた大きな恵みなのだと、お教えにられました。

EYさんの場合も、その症状や過程をみれば、基本そのように表れています。ですから、感染前より、感染後の方が、食べ物の好き嫌いが減り、美味しいと感じるようになり、これは身体の本来機能が改善された証しではないでしょうか。

また、義母様が亡くなられた後のお顔が、優しそうで今にも起きそうであったのも、普段の浄霊によって、体内がしっかりと浄化されていたからではないでしょうか。

ワクチンや予防接種は、信仰する私達にとって、大きなテーマとなることがあります。それらは体内に本

来備わる浄化力を薬物によって弱め、表れた苦しみのみを軽減しようとする消極的な対象療法で、いわゆる体内浄化の先送りであり、決して根本からの健康法ではないとみ教えいただいているからです。

しかし、接種の判断については、ひとりひとりの体力や健康状態、仕事や取り巻く環境、出会う方々への配慮や法規制等々を鑑みて、決めつけや独善に陥って争いや信仰への誤解、健康を害することを避け、明主様の願いに外れることにならないよう、み教えの一片にこだわることなく総合的に、そして柔軟に判断することが大切ではないでしょうか。

接種判断を、ことさら信仰上の重要事と捉える向きもあります。信仰の本義は、日々自己の人格を高めることにこそ意識し、利他の人を目指すこと、利他の社会を実現することが本来で、このことを忘れないようにしたいものです。

古賀集会所、ATさんです。今年の正月、いつものお正月なら来るはずの従兄弟Sさんが来ないので、住まいを訪ねましたが、姿が見えず、警察に捜索依頼したところ、年暮れに自宅付近で倒れているところを発見され、病院に運ばれていることが分かりました。頭をひどく打ち、意識がもうろうとしていて、Aさんは「独り暮らしのSさんを自分が見て上げるしかない」

と決心されます。彼の娘さんはブラジルに住んでいますが、彼女も父親と連絡が取れなくなり、心配していました。ラインで日本のAさんを見つけ、連絡を入れてきたようですが、彼女はポルトガル語でなかなか通じず、苦勞をしたようです。やつと交わせた話の中身は、「すぐには日本に行けないが、私に出来ることはなにか」ということでした。Aさんは、信仰の話を伝え、

「救世教の信仰を通して祈ってあげて」と話したところ、素直に受け入れられました。すぐに聖地に連絡し、彼女の住所に近い、いづのめ教団の現地拠点聞いて知らせました。すると驚いたことに彼女は、以前勤めていたホス建設有限会社が、サンパウロ教会の建設に携わり、よく知っていたのです。不思議な深い縁で、日本の福岡とブラジルのサンパウロで起きていることが線で繋がっていたのです。彼女は、直ぐに当地教会を訪ね、一緒に祈願参拝をしていただき、入信と祖霊祭祀の申し込みをされました。

彼女は、ブラジルの教師に導かれ、「考え方が変わつた。これからの人生を信仰中心の生き方で過ごしていきたい」と話しブラジルから毎日福岡の父親に向けて浄霊をしています。最近ではSさんも随分元氣になられたそうです。

神様は、人間の智慧や常識をはるかに超えたところで私たちを包み込んで下さいます。何処にあつてもお

守り下さる神様の愛に気づき、お受けするための努力が必要となります。

今年も早や半年が過ぎようとしています。

さほどのことも成せていませんが、しかし、健康に恵まれ、仲間に支えられ、感謝の日々を過ごさせていたでいます。

七年前、我が家の庭に、小鳥の巣箱を設置しました。

今年も四十雀が入り、今第二陣が子育ての真つ盛りです。普段親鳥は「チツ、チツ」と可愛いくさえずり、我が子のようにさえずってきます。しかし、玄関の通路脇に設置したもので通るたびに「ヂイ、ヂイ」と警戒音を発声させ、仲間に伝えます。そのたび私は「コレコレ、私は大家だよ！私のお蔭でお前達はこのに居れるのだよ」とつぶやきます。そう言いながらふと思いました。「神様からしたら、私も四十雀と同じ。ここを、私のものと思ひ違ひをしている。もともと誰のものでもない。勝手に占有しているのだ」と。小鳥に教えられ「勝手なものだ。自分の事は何も見えていない」と一人含み笑いをいたしました。

今年後半、明主様御生誕祭に向け、謙虚に自分を見つめ、御用に邁進させていただきます。

どうぞよろしくお願いいたします。

感謝奉告

明主様に繋がっている実感

岩見沢グループ I H

令和三年四月聖地直結の会に入会させていただきました。地域の方々と明主様の信仰を求めて生活を送っておりました。80代となって、普段から何かと身体にご浄化をいただくようになり、その都度ご守護をいただいてまいりました。感謝のご奉告をと思いながら今日まで来てしまいました。

同年十月、検診の際「前立腺癌の疑いあり」との診断を受けました。後日、細胞をとって再検査することになりました。

現在は、子供達は独立しており、妻との二人生活となりました。私が癌だった場合、家のこと、妻のこと、そして子供達のことを思い、心穏やかではいられない日々を送っていました。地域の信者さんにご浄霊に来てくださり、私の経過をお話したところ、すぐに聖地に連絡してくださり、救世会館でご祈願をしていただきました。

再検査の日を迎え、検査入院。検査の結果は「癌」

の疑いなし」となりました。再々検査の結果も疑いなしです。大神様明主様に感謝の気持ちで一杯になり、自然と涙がこぼれてきました。

今年一月、雪掻き中に背中に痛みを感じ、診察を受けたところ、二ヶ所の脊椎圧迫骨折と診断されました。大きな固いコルセットを装着しての生活となりましたが、無事、冬を乗り越え、今はコルセットも外すことができ、普通の生活ができております。

昨年夏、私の次男が職場の人間関係で「鬱」のような症状になり、一時出勤できない状態になりました。数年前に妻を亡くし、一人で暮らしていたので、しばらくの間、私の家で通院静養しておりました。我が家にいる間は、直接ご浄霊のお取次ぎも許されました。職場の配慮もあり、勤務する部署を変えていただき、今は通常勤務ができています。地域の方、また聖地のご祈願のおかげと感謝しています。

娘の長男が、今年の三月にクローン病で入院しました。聖地でのご祈願をお願いいたしました。まだまだ、私の周りでご浄化が続いていますが、仲間の信者さんに知恵とお力をお借りしながら、ご守護にお応えすべく、大神様明主様に求め、私達家族の霊籍の向上を目指して精進いたしております。

大神様、明主様ありがとうございます。

国 祭

神仙郷完成70年、さらに輝く箱根



新文明創造に向かって、新たな出発の決意が奉告された



世界的大転換期を迎えている今日、私たちの使命は大きい

地上天国のひな型である神仙郷から発する御神業の拡がりを、さらに国の内外に推し進める働きが加速している。一人の救いから、家庭、地域社会、国、世界人類の救いへと、御経綸の展開は弛まない。



信仰実践に取り組み、信徒の喜びの奉告が結集した地上天国祭



6月15日、多くの参拝者が集う。参拝席に喜びが溢れる

聖地瑞雲郷建設に込められた明主様のご負託に応えるべく、信徒は集い、祈りと決意を捧げた。海外からも120余名の参拝者が祭典に臨み、明るく活気あふれる地上天国祭が挙行された。

一堂に会し四国資格者会開催
本格的活動を熱く語り合う

お世話の学びに熱がこもる



5月23日四国資格者会…コロナ禍があったため、四国の資格者が一堂に会するのは今回が初めて。まず、お互いが現在の活動状況について報告を行い、その後、西村代表からお話をいただいた。

土の聖地で救いのみ光拡大を祈る

6月6日、平安郷月次祭（大弥勒御尊像月次祭）に関西グループ信徒約35名が参拝。その後、上の茶屋で接待をいただく。茶屋には美術品が展示され、名品のお茶碗を鑑賞しながらお抹茶をいただき、一同感激のひとときを過ごした。その後、平安郷研修センターに移動し、西村代表を交えて信徒集会をもち、心新たに御生誕祭に向け聖地を出発した。

春秋庵前も厳粛な空気に



西村代表の話に傾聴する参加者



基本姿勢を確認、共有して出発



代表から問題提起、座談会



全体会合に熱がこもる

6月14日、地上天国祭前日、専従者研修会が開催された。初めに西村代表から基調となるお話をいただき、班に分かれて座談会。夜は全体会合で、それぞれ活動状況を報告し、抱えている課題やいただいたご守護報告を共有した。

信仰仲間と交流、会話が弾む



一人一人の紹介に、心込む会場



人の和、熱の輪広がる信徒集会

6月15日、地上天国祭終了後、執務棟にて聖地直結の会全国信徒集会を開催。80名余の会員が参加した。聖地直結の会で迎える6回目の地上天国祭。新会員の発表に、五年前、本会発足時に味わった感動、喜びを思い起こす参加者もいて、会場内は熱い空気に包まれ、参加者信徒の表情も明るくはじけていた。

シリーズ 明主様(5) “青年時代・明と暗”

明治二九年(一八九六年)三月、普通では八年間かかるところを、一年短縮した七年間で浅草尋常高等小学校高等科をめでたく卒業することができた。教祖一三歳の春のことである。「卒業生名簿」には、教祖の欄には、

実業 岡田茂吉

とあるから、しばらく家業を手伝ったのであろう。

幼い時から絵を描くことが好きだった教祖は、「大好きな絵で身をたてることができれば」という思いがしだいに大きくふくらんでいった。教祖より一〇歳年上で明治五年(一八七二年)生まれの志づは、両親を助け、一五歳の時から築地の料亭「花月」で働くようになり、やがて結婚した。不幸にしていくばくもなく夫に死別したが、それにもめげず家業であった貸席「静月」を引き継ぎ、女手一つで切り回した女丈夫であった。

この姉の助けもあって、教祖は明治三〇年(一八九七年)九月、念願の「東京美術学校・予備ノ課程」(後の東京芸術大学)へ入学することができた。

教祖は毎朝、家中で一番早く起きてご飯を炊き、弁当も自分で作った。それは当時、四〇代のなかばを過ぎ、苦しい生活に疲れた母の体をいたわる息子の心づかいからであっ

た。そして、浅草千束町から上野公園内の学校までの十数町(約一・五キロ)を元気に往復したのであった。

東京美術学校は、明治三二年(一八八九年)岡倉覚三(雅号・天心)らによって東京の上野に開かれた。当時は西洋文化に心酔するあまり、日本人が日本美術の優秀さを忘れてしまう傾向が強かった。天心らはこれを憂い、日本美術興隆のための教育施設としてこの学校を設立したのであった。

しかし、教祖の喜びも束の間のものであった。美術学校に通い始めてわずか数か月たったある日、教祖は突然目がかすみ、物が二つに見え出したのである。この眼疾はしつこくてなかなか治らなかつた。どの医師も決まって首をかしげるばかりであった。画家を志す者にとって、悪性の眼病は致命的である。悩みぬいた末に、教祖は涙をのんで退学届けを出した。

眼病は、二年ほどかかっても一向に良くならず、治療を諦めてしまった。さらに、あたかもそのあとに追い打ちをかけるように、今度は肋膜炎にかかったのである。

肋膜炎の時は、治療費もままならぬため、東京帝国大学医科大学付属病院の施療科に入院したが、この施療科というのは、入院費も薬代も無料である。その代わり、医学生の実習の実験台にならなければならぬ。その精神的苦痛は並大抵ではない。

当時のことを教祖は、つぎのように記している。

「私は、十五歳の時、肋膜炎を病み、医療により一年位で全快、暫らく健康であったが、復再発したのである。然るに今回は経過^{はかばか}捗々しくなく漸次悪化し、一年余経た頃、畢に肺結核三期と断定せられた。其時^{その}が丁度十八歳であった。そうして最後に診察を受けたのが故入沢達吉博士で、同博士は綿密に診察の結果、最早^{もはや}治療の見込なしと断定せられたのである。」

その心境を、「執行日^{しつこうび}を定めぬ死刑の宣告を受けたようなものである。」と後に書いている。しかし、その時、教祖の衰えた^{おとろ}肉体の奥底から不思議な力が湧き起こった。断じて生きなければならぬ、生きたい、という心の奥底からの叫びにどう応えたらよいか。そのきっかけを求めて一日を過ごした。

「そこで私は決心した。それはどうせ自分は此儘^{このまま}では死ぬに決つてゐるとすれば、何等か変つた方法で、奇蹟的に治すより外^{ほか}に仕方がないと意^{おも}ひ、それを探し求めたのである。」

ある日のことである。教祖は『本朝薬草彙本』という薬草の本を見ていた。草根木皮^{そうこんもくひ}の絵を眺め、花や葉、実などの効用^{こうよう}についての説明を読むうちに一つの考^{ひらめ}えがふと閃いた。それは植物のうちに、これほどの有効成分が含まれているのだから、菜食^{さいしょく}にしてみたらどうだろうかという思い付きであった。そこで試みに実行してみた。すると非常に調子が良いのである。

こうして教祖は、それまで医師の指示に従つて動物性の栄養食ばかりを盛んにとつていたのを、煮干^{にぼ}しもとらぬくらの徹底した菜食主義の食生活に切り換えてみた。するとどうであろう、医師から不治と診断された肺結核が奇蹟的に治癒^{ちゆ}、全快できたのであった。

このように夢多いころ、相次ぐ難病に悩まされたため、何かにつけ教祖の心はふさがちであった。当時を回想してつぎのように記している。

「十五歳から二十歳頃までは人並以上の意気地なしで、見知らぬ人に遇^あうのは何等^{なんら}の意味もなく恐ろしい気がする。特に少し偉^{えら}いような人と思うと、思うように口が利^きけない。又若い女の前などに出ると、顔が熱して眼が曇^{くら}み、相手の顔さえもロクロク見え口も利けないという訳で、大いに悲観したものである。従^{したが}つて自分の如きは一人前の人間として社会生活を送り得るかということ随分危^{あや}んだのである。そんな訳であるから、その頃世間の人を見ると、自分よりみんな利巧^{りこう}で偉いように見えて仕方がなかつた。」

(次号へ続く) 『東方之光』(上巻)より

※文字数の関係で省略箇所があります。詳細は原典を参照下さい。



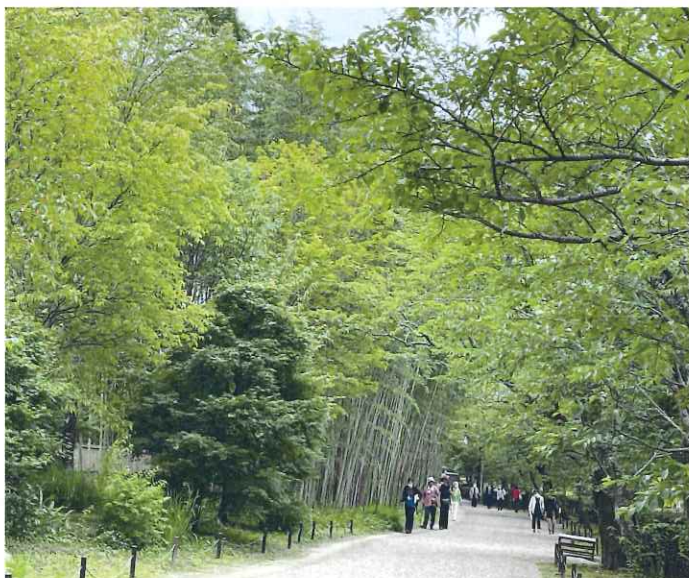
『東方之光』上下2巻



清楚に佇むアジサイ



覆屋がかけられ修復を待つ観山亭



清々しい緑溢れる平安郷参道



緑濃き箱根苔庭



ブラジル参拝団、岡田茂吉記念館訪問



咲き競う萩とアジサイ

自身のウツと子供の自閉症が改善

ファビアナ・バルジョナ・ド・ナシメント・

コウチニヨ・ガンベタ

皆さん、おはようございます。本日は、信仰の基本行によつて私と私の家族の人生が一八〇度変わった体験についてお話したいと思います。

私は祖母の代から続く救世教の家庭に生まれた、いわゆる信仰三世です。祖母は私が生まれ育ったリオの開拓布教に、先達の一人として尽くした人物でした。

12歳で「おひかり」を拝受して以来、私もそうした祖母の御用奉仕を手伝ってきました。

一九九九年、母の仕事の都合で、私たち家族はサンタカタリーナ州にあるジョインヴィレという街へ引っ越ししました。当時ジョインヴィレには教会がありませんでしたが、私は市内の信者さんたちのお宅で開かれる浄霊会に参加するなどしながら、信仰を保ってきました。

しかし二〇一八年二月に祖母が亡くなると、私は大きな精神的ショックから強い不安障害に悩まされるようになりました。そしてご奉仕を続ける気力を失い、信仰的な実践

も何一つしなくなってしまうたのです。夫の転勤でサンパウロへ引っ越した二〇一九年一月には、もう「おひかり」を掛けてさえいませんでした。

すると引っ越して二カ月が過ぎた頃から、私は様々な健康問題を抱えるようになりました。不安障害が悪化し、ついには重いウツまで患うようになった他、体全体の痛みと不眠症に悩まされ、後ろ向きで自滅的な思考にとらわれるようになったのです。やがてベッドから起き上がることさえ煩わしく思うようになってしまいました。

そうした中、精神科を受診して様々な規制薬物を服用するようになりましたが、問題は解決されず、ただ強い副作用に悩まされるだけでした。

また私たち夫婦には三人の子供は8歳の長男と6歳になる双子の男の子がいますが、長男は3歳の頃から自閉スペクトラム症による感覚処理障害（五感が過敏に働いたため生活に大きな不便や不快をもたらす病気）を患っていました。

息子は足の裏の感覚が過敏で床につけないため、つま先歩きをしていました。また自身の体を傷つけたりすることもよくありました。自分に対して非常に攻撃的で、苛立ったり、やりたいことを邪魔されたりすると壁に頭をぶつけるようなことさえあったのです。

またそれらに加えて尿失禁と過活動膀胱も患っていました。尿を漏らすため一日に四、五度はズボンと下着をはき替え、夜は大人用のオムツをはいて寝なければいけません

でした。

医師の診断に従い、精神を安定させ失禁を抑えるための薬を三種、それぞれ一日に摂取できる最大量を服用していましたが、期待していた効果はありませんでした。

そこで、二〇一九年一二月に小児神経科医の指導のもと薬を変えましたが、感覚器官を事実上麻痺させてしてしまうほど強い薬だったにもかかわらず、効果が確認できたのは最初の15日間だけで、その後、症状は元通りとなってしまうました。

二〇二〇年一月、ジョインヴィレ市で姪のお初参りに同行し、そこで浄霊センター長と会いました。その折センター長から「おひかり」の再拝受を勧められたため、「サンパウロに帰ったら最寄りの教会を訪ねて、そこでお願いしてみます」と答えてはみましたが、内心その気はありませんでした。

三月になると状況は悪化し、家事も育児も満足にできなくなってしまうました。私は深い悲しみに包まれ、深刻な不安障害を抱かえながら完全に行き場を失ってしまったのです。

ジョインヴィレの浄霊センター長が私の携帯電話へ定期的に明主様の御教えを送ってくださるようになったのは、その頃のことです。私は霊界がどれほどしつかりと私のことを見守ってくれていたのかを知り、とても感動しました。一番苦しかった時期、最も必要としていた時に与えられた

御教えは、当時置かれていた自らの状況にピッタリと合い、私に勇氣と希望をもたらしてくれたのです。

こうして私は御教えを拝読するようになり、再び唯心的価値観に目覚めていきました。また四月になると、Tzunohi[®]で配信される朝夕の参拝に時々参加したり、献金を添えた感謝奉告書をお上げしたりするようになりました。

そうした取り組みを通じて、私は自身の靈性が強まり、浄化を乗り越える力を得たように感じました。またセンター長のオンライン御教え学習会に参加を始めた頃から精神的な安定を少しずつ取り戻し、明るく朗らかとなり、「もう一度教会に通いたい」と願うようになりました。そして七月、私は再びジョインヴィレを訪ねてセンター長とお会いし、「おひかり」を再拝受させて頂くこととなったのです。

その後、家族への浄霊を初めとする信仰の基本行に自宅で取り組んだり、Tzunohi[®] TVで配信される朝拝・夕拝に毎日参加したりするようになると、状況はあつという間に改善されていきました。

そして靈的・情的に一層力を得ると、それまで服用を続けてきた薬をやめなければいけないと思うようになり、医師に相談して薬の量を減らしていくことにしました。現在、薬はもう全く服用していません。ウツや不安障害からも解放されました。

また長年長男が服用してきた薬については、副作用が強いため、医師の同意を得て、その全ての服用をやめました。

そして長男に対する浄霊を毎日徹底すると、ほんの数週間でその症状はかつてないほどに改善しました。精神状態も著しく回復し、より穏やかで優しくなった他、集中力も続くようになり、過敏症の問題もほぼ認識できないほどまでに改善されたのです。

学校の成績も上がりました。いま長男を見た人は、誰もが自閉症スペクトラム障害を患っているとは思わないでしょう。尿失禁のほうも日中は起きなくなり、夜尿症のほうも劇的に改善されました。

長年様々な治療やセラピー、多くの薬の服用を続けてきたにも関わらず十分な回復が得られなかったことを考えれば、一体誰がそうした成果を想像することなどできたでしょうか。

しかし私が毎日浄霊を取り次いだり、救世教の信仰実践に再び取り組むようになったことで、長男は驚くほど短期間のうちにほぼ全ての浄化を克服することが許されたのです。

更に嬉しいことに、双子の一人グスタヴオが、Izumiで毎日配信される参拝に自らの意志で参加するようになりました。息子は明主様の御教えや本部長のお話を時々目に涙を溜めながら聞いています。

私と一緒に教会のご奉仕に参加してきたグスタヴオは自ら希望し、昨年の一二月二一日に「小光」を拝受しました。加えてその日は、しばらく信仰をお休みしていた母も「お

ひかり」を再拝受し、再び御神業にお使いいただけるようになりました。

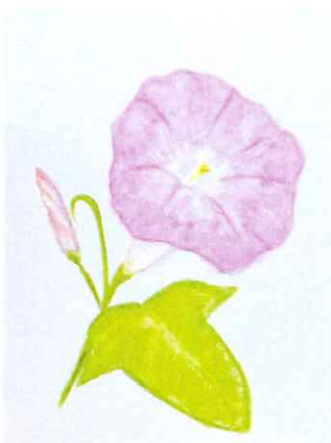
「小光」を拝受したことにより、我が家の信仰四世となった息子は今「大きくなったら浄霊センター長になって大勢の人を助けたい」と言っています。

大神様と明主様には感謝の気持ちでいっぱいです。また私を信仰の道へと導いてくれた祖母や、これまでずっとお世話をいただき、辛い時に支えてくださったセンター長にもとても感謝しています。

今まで頂いてきた浄化は、私が信仰を深め、人として成長するうえでとても大切なものだったと思います。

御用奉仕と救世教の信仰実践が自分の人生にどれほど欠かせないものかを分かせていただきました。なぜなら、それらによって私は浄化を乗り越え、運命を変える力を得ることができたからです。

今後も信仰の基本行に精進しながら、誠の奉仕を通じて大神様、明主様のお役に立ってまいりたいと思います。ありがとうございます。



【お知らせ】

■ 聖地祭典行事のご案内

7月1日 箱根聖地 ご面会
7月1日 熱海聖地 月次祭

■ MOA美術館催し予定

7月14日～8月29日
北斎 The Great Wave × Digital

新連載『21世紀を生きる』今月は著者の都合によりお休みさせていただきます。



御教え『明主様に倣いて』お届けについて

世界救世教では、平成30年に「世界救世教とは一明主様の御教えに求めて」を発刊し、明主様の願われる「救いと建設」を果たし得る教団の再建を目指し、全信徒宅にお届けされました。

この度、第二段として「世界救世教とは一明主様に倣いて」を発行し、各々の信仰・人格の向上に資する願いをもって、全信徒宅にお届けすることになりました。

神の御心を求め、学びを深めていくことで御神意を覚り、何ごとにも動じぬ安心立命の境地を許され、天国人としての道を雄々しく歩ませていただきたいと思います。

明主様と聖地に直結する会

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



“清らかな心”